

神 近 市 子 に つ い て

—愛と再生の軌跡—

貞 弘 陽 子

目 次

はじめに

第一章 市子の思想形成

—文学と宗教—

第二章 市子の恋愛

—日蔭茶屋事件—

第三章 市子の社会的活動

—たくましき再生—

おわりに

はじめに

「大正は女の時代であった。」あらゆる意味で女の時代であった。その華やかさにおいても、その激しさにおいても、その美しさにおいても……。

大正は、ひたすら他への依存しかしえなかった女性が、自らの足で歩み始めた時代である。恋愛においても、単にその対象でしかな

かった女性が、恋愛の主體的な当事者としてあらわれたのである。ここに一人の女性がいる。「神近市子」彼女もまた主体的な生き方を求めて、試行錯誤をくりかえしつつ、激動の時代を力強く生きぬいた女性である。彼女の自伝を読みおえた時、私は異状なまでに興奮した。そして、そのあとがきに心を奪われた。

自伝の筆をおくにあたって、八十余年をふりかえってみると、どうかか自分の意志に従って生きてこられたことに、私はささやかな喜びを感じる。数字であらわすならば、おそらく七十パーセントは自分の意志を貫くことができたと思う。

何という驚きであろう。その凜としたことばの響きの中にちりばめられた彼女の生涯を思う時、私は深く感動すると共に、何ともいえないやさしさに包みこまれたような気がした。このやさしさは、いったい何だろう。私は考えずにはいられなかった。そして、神秘的とさえいえるこのやさしさの秘密を明かしたくなった。

彼女はその著書『女性思想史』の中で次のようにいっている。

思想とは、精神的、現実的経験を総合して、人類社会の安定幸福をはかる推進力である。

私はこの文を読むことよって、彼女の思想家としての原点をみる思いがする。彼女は、「人間」をこの上なく愛し、「人間の幸福」を

何よりも願った人である。このへんに、彼女の魅力の秘密をとく鍵があるようだ。「自分の意志に従って生きる」ことの意味を考えながら、自伝にそって彼女の生き方をおつていこう。

第一章 市子の思想形成

—文学と宗教—

市子は、明治二十一年長崎県の小さな村に、五人兄弟の末子として生まれた。幼くして一家の大黒柱である父と長兄を次々と失い、極貧の中に育った。彼女の生いたちは、幸福であったとはいいがた。母の愛を感じながらも彼女は孤独であった。変わった子とみなされ、「できてこない」「おとこおなご」となじられた彼女は、肉体的のみならず精神的飢渴感に常に悩まされた。

そんな彼女が見出した喜び、それが読書であった。偶然手にした『文芸倶楽部』をてはじめとして、彼女は文学の世界へ入り込み、内奥の渴望を満たしていった。

こうしてだれも気づかないうちに、私は母や姉の生活圏を抜けだして、文芸の広野に迷いこんでいた。そしてそれらしい、私は二度と耕作（姉、政子の夫）や姉たちの世界には帰っていかなくなった。

彼女は人知れず文学を通じて、自らの世界を構築していったのである。

それは、活水女学校に編入し、新しい友人を得ることによって、さらに推し拡げられる。そうして彼女は、文学のもつ不思議な魅力

にとりつかれ、自他共に認める文学少女に成長していった。が、やがてそこでの勉強に満足できなくなった彼女は次に津田英学塾に入学した。

彼女はさまざまなハンディを克服しつつ、勉強にはげみ、外人教師に「彼女はスプレンドイド・ヘッド（凄い頭）をもっている」といわせるほどの成果をあげた。読書の方も進み、木下尚江・島崎藤村から、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキーに至るまで彼らの作品を読みあさった。特に印象にのこっているのは、木下尚江の『良人の自白』であるという。日露戦争のまっ最中に反戦を唱えて書かれたこの作品は、社会小説として位置づけられている。市子は長崎にいる時、久美子という友人と、この小説の登場人物お登喜について議論した。お登喜は由緒ある武家の娘であったが、武士の商法で失敗した親のために、商家へ嫁がされた。が、商家での生活にとけこめず、放蕩者の夫に悩まされ愛悶の日々をおくっていた。ふとしたことで知り合った若い弁護士白井俊三と愛し合い、妊娠して、自ら命をたつてしまうのである。市子はそれを「美しい」とみたが、現実主義者の久美子は「不道徳、不健康だ」ときめつけた。それに対し、市子は「久美子さんは、芸術がわからないのではないか」と反論し、結局、意見の一致をみることはできなかったという。市子のロマンチストぶりのうかがえるはなしである。

虚偽にみちた世の中であるが故にふりかかる苦しみをその身に負いつつけん命に生きようとする人々の姿を描いたこの小説は、彼女を人道主義へ導くきっかけになった。

そうして彼女は、自己の文学理念の発現と展開の場を求め、「作

家になりたい」という志望を固めていく。

東京に出てきたものの、ほんとうに心を開いて語りあう友もなく、自分の文学志望を打ちあけて相談する先輩もいなかったの
で私は孤独だった。

さんざん迷った挙句、彼女は『青鞥』に入社した。

『青鞥』いうまでもなく日本で最初の女性の手による女性のための雑誌で、近代女性の思潮の出発点である。平塚らいてうの

原始、女性は太陽であった。真正の人であった。

という有名な宣言と共にうぶ声をあげた『青鞥』は、女性の覚醒をうながし、女性の自我の確立をめざした。社会的には嘲笑をうけ、『青鞥』の女性たちは悪魔視されたが、若い女性たちの大きな支持を得た。そのことをらいてうは、自伝の中でこう述べている。

封建的な家庭にしばりつけられていたこの時代の多くの女性たちは、わずかに女にゆるされていた文学の道に拠って、いろいろの矛盾を感じ、苦しんでいるうちに、やがて自我に目ざめてきたのでした。(略)まったくそのころの女性が、文学に対して抱いていた憧れの大きさは、おそらくいまの若い女性には想像のつかないものがあつたでしょう。

このことは、市子として例外ではなかった。『青鞥』の同人になることによって、彼女の若々しい躍動する精神は、開かれた文学の世界の中で自由に飛翔した。『青鞥』に参加したのは、一年たらずであった。が、彼女は、文学の世界にあふれる自由と現実の、つまり自分のおかれている世界の不自由さとの落差を鋭く感じとり、その不自由さに抵抗する自分をかりたてている何かを無意識ながらつかん

でいた。未熟であっても、不十分であっても、彼女は自らの思想に生きる人間として、人生のむかうべき方向を決定するのである。

日本文学、なかでも社会小説からロシア写実主義文学へ、という彼女の文学の系譜をみると、彼女のときぞまされた感覚は、小説のもつ虚構性のうちに真実以上の真実をみいだしたのではないか、という気がする。その後、『蕃紅花』『女人芸術』『婦人文芸』と数々の文芸雑誌に関与し、文学に情熱をかたむけながらも、ロシア文学の延長線上にマルクスやベーベルをおくことによって、彼女は文学の世界を通り抜け、しだいに現実社会へ目を向けるようになっていった。

市子は自伝のまえがきに、自分の人生を支えてくれたのは、多くの友人たちと母の慈愛である、というようなことを書いている。彼女の母親ヘナは、夫と二人の息子に先立たれ、苦しい生活の中で市子を育てあげた。しんの強い人だったらしく、ヘナが市子に与えた影響は小さくない。彼女は熱心な仏教徒であったが、宗教的偏見にとらわれることのない豊かな人柄であった。市子がミッシェンスクールである活水女学校に編入するさいも、「頂上は一つ。どの道を行っても登りつめれば同じところに着く。」と市子に言いよかせたという。苦勞ばかりの人生を送ってきたヘナの「美妙の金言」ともいうべきこのことばは、素朴であるが故により強く私の心にひびいてくる。このヘナのことばを胸にひめ、彼女は内面を深めていった。

市子は、ヘナの死後一篇の詩を彼女にささげている。その中に次のような部分がある。

母よ

こうしてあなたを死なせた私は

自分の身の夕暮れに

あなたのように死のう

子供達に求めることなく

世にも人にも求めず

あなたに渡されたバトンを

そっと子供達の手へ渡して――

他に求めることをせず、ひたすら与えつくことに終始したハナの純朴なヒューマニズムの実践は、市子の琴線にふれぬはずはなかった。

ハナの限りない深い愛情とキリスト教における何人にも無条件にそそがれる神の愛とは、市子の中で違和感なくとけあい、それらは人間愛として統合されていく。そして、「真実の祈り」、つまり偽りのない信仰の真髄としての祈り・精神の糧としての祈りを知った彼女は、敬虔な気持ちで洗礼をうけ、豊かな人間性を開花させていくのである。

文学と宗教、この二つが密接に関わりあいながら、彼女の思想は形成されていった。

私はここでもう一つ書いておきたいことがある。それは彼女の容貌についてである。

はじめて彼女の写真（若い頃）を見た時、私は強いショックをうけた。すさまじいまでの容貌に圧倒されたのである。つりあがった

濃いまゆ、まるで手負いの獣のような鋭い目、きりつとした口元、彼女の一途な性格を何にもまして、この容貌は物語っている。

全体としてかたく引きしまった男性的な光をおび、なんとなく不安なような恐ろしいような、危険性をひそめているようにも見えまた。

これは、らいてうの感想である。

彼女は、誰にも強い印象を与えずにはおかない自分の容貌にコンプレックスをもっていたようで、「私は自分が醜いことが、いつも悲しかった」と書いている。私はここで何も彼女が醜いかどうかというようなことを問題にしようとしているのではない。年と共に変化していった彼女の容貌に、彼女の生きざまを重ねあわせてその変化の意味を考えてみたいのである。

市子の容貌の変化は、彼女の精神の歴史をそのまま示している。まなじりをあげんばかりの鋭い容貌が、いつのまにか穏やかなやさしさへと変化している。それは、時の流れの中に自らを埋没させることによって、自己の人生を想い出の中に沈めてしまった者のもつような軽薄なものではない。彼女の容貌の中にあらわれたやさしさは、苦渋にみちた人生に真正面から体当たりして生きぬいた者だけがもつ奥深い普遍的なやさしさなのだ。

それでは、彼女にそのやさしさをもたらしたものは何かを、恋愛を通して考えてみよう。

第二章 市子の恋愛

―日蔭茶屋事件―

『青鞥』の同人であることが学校にバレ、半ば左遷のような形で弘前の女学校の教師となった市子は、ここも同様の理由でわずか一学期だけでやめさせられてしまう。再び東京にもどってきた彼女は、新聞記者として、新たな出発をする。

東京日日新聞(現・毎日新聞)社会部記者となった彼女は、堪能な英語力でもって、「朝日の竹中繁子・毎日の神近市子」と並び称され、めざましい活躍をしていく。彼女はその実力を、記者という活動の場においてあますところなく発揮した。一度の添削で記事の書き方の要領をのみこんだ彼女は、あちこちに記事をとりにとびまわり、充実した毎日をおくり、生きがいさえ感じるようになっていった。こうして、小さなつまづきはあったものの、彼女の社会への第一歩は、明るい未来を呈していた。彼女自身、この記者時代を「人生最良の思い出」として脳裏にやきつけているし、阿部真之助氏も「嵐から嵐への、幕間の憩いの日」とみておられる。

記者としての初仕事は、廃娼運動をおしすすめていた日本基督教婦人矯風会会長・矢島揖子へのインタビューであったという。戦後市子が代議士として売春防止法制定に尽力することを思うと、何か因果めいたものを感じさせる。

記者生活を通して彼女の視野は大きく広がっていく。文士たちとの交流を深めながら、文学によって培われた鋭い感受性は、社会の

現実を敏感に感じとめるようになっていた。そうして彼女は、万朝報の記者であった宮嶋麗子らによって、社会主義運動・労働運動へ目を向けていく。

私は記者の仕事を通じて、働く貧しい人々の暮らしをよくしようとする社会主義者たちの正義と情熱に共鳴し、私もその人たちと同じ道を志すことになったのである。

記者時代に彼女は「愚直女史」とあだなされたという。私は思わず苦笑してしまった。これほど彼女を端的にあらわすことばは他にみあたらないと思うからである。が、この「愚直さ」は、恋愛において悲劇的な結果をもたらす大きな要因となる。

市子は、大正四年六月頃から、大杉栄の「仏蘭西文学研究会」に積極的に参加するようになる。彼女のことをばを借りれば、「未知の激しい流れの中に身を躍らせる」ことになるのである。

日本のアナキズムの指導者としての地位を確立し、自らの思想を高らかに謳いあげる大杉に市子がひかれていっても何の不思議はない。山川均は「大杉は、いつでも自分自身の太陽系をもち、その周囲を回転する衛星にとりまかれて、つねにその中心に座っていないければならない人だった。」と彼を評しているが、市子は自己の内ここの「太陽」としての大杉を位置づけ、その輝きに目をくらまされながらも、ぐいぐいひきつけられていった。恋愛のもつ魔力の前には、何ものもが無力であり、どのような力も雲散霧消してしまう。それはあたかも強烈な酒のように私たちを酔わせ、しばしば無軌道な方向へひきずりこもうとする。

『平民新聞』第二次『近代思想』の相次ぐ発禁で自暴自棄にな

っていた大杉がその突破口として見出し出したのは、恋であった。その恋の相手が市子であり、伊藤野枝である。

もう何もかも失ったような僕が、その時に恋を見出したのだ。恋と同時に、その熱情に燃えた同志を見出した。そして僕はこの新しい熱情を得ようとして、ほとんどいっさいを棄ててこの恋の中に突入していった。(『大杉栄自叙伝』)

大杉には、堀保子という糟糠の妻がいた。そこへ市子があらわれ、野枝が入り込んでくる。

伊藤野枝、彼女も強烈な個性の持ち主であった。その生命力、その行動力には、誰もが驚嘆する。最初の夫、辻潤をして、彼に「永遠の女性」といわしめた野枝は、市子より七才年下である。叔父の独断で決められた結婚に反発して上京し、辻潤の妻となり、らいうから引き継いだ『青鞥』の歴史をとじた女性、それだけでも十分私たちをひきつける魅力をもっている。その後、市子との恋愛闘争に勝ち、大杉と運命を共にするのである。

市子は、自分と野枝を比較して、こういつている。

私と伊藤野枝女史は、ほとんど対蹠的な過去と性格を持っている。早熟で才気ばしっていて、小さな身体に似ず、思いがけない大胆さを發揮できるのが野枝女史であり、年上で身体も大きいのに、臆病で魯鈍で神経質なのが私だった。その二人が困難な関係につながれ、無理なポーズを見せ合わなくてはならないのだから、敵意はたがいに強く、調和できないのが当然だった。

無理なポーズをとらねばならなかったのは、大杉とて同じであっ

た。そのポーズから、苦しまぎれにうち出されたのが、フリー・ラブの理論である。「おたがいに経済上独立すること。同棲しないで別居の生活を送ること。お互いの自由(性的すらも)を尊重すること。」私は、この三条件をどのようにとらえてよいか、正直いつてわからない。ただ、大杉の説く自由が、お互いを独占しないということであるなら、この三条件は恋愛の前には全く無意味なものであろうということはいえると思う。何故なら、恋愛において相手を独占しようとする欲求は、人間の本性に根ざすものだ考えるからである。

ジャーナリズムの蕪々たる非難のなかで、三人は出口のない袋小路に追いこまれていく。市子は新聞社をクビになり、野枝は乳のみ児をかかえて辻のもとをとり出し、大杉のところへこがりこむ。経済的窮乏に陥った大杉に、市子は援助を惜しまなかった。このような市子の態度を、もろさわようこ氏は、『おんなの歴史(下)』の中で、「思想的に主体性がかけた權威追隨主義的な態度」だとして非難しておられる。もっともな意見だと思いが、私は市子にそのことばを投げかけるにしのびない。何故なら、彼女は怒涛の如くあれくるう情念の世界で、愛情の不完全燃焼に苦しみ、生殺しの状態にひたすら耐えていたのだから。女としての耐えられなさの限界にきていた彼女を救いうるのは、「人間としての大杉氏の誠実であり、良心」であった。しかし、すでに野枝と深くむすびついていた大杉が市子に与えたのは、風化した恋愛の化石であった。

大杉は、「真はただ乱調にある」(『生の拡充』)といったが、市子はこの恋愛における自己実存の意味を問ひ、破調のうちに真実を求

めようとした。こうしておきたのが、日蔭茶屋事件（大正五年十一月八日）である。

大杉は常日頃から、社会革命より人間革命に重きをおき、新しい倫理の創造の必要性を主張してきた。にもかかわらず、恋愛においては旧態然とした態度でしかのぞむことができず、幕末の志士たちが口ずさんだ「酔うては枕す美人の膝、醒めては握る天下の権」という歌の域をいくらもでてはいなかった。

大杉が一人で仕事をしに行くはずだった葉山へ野枝もいっしょに行ったと知った市子はあとさき考えることなく、短刀をふところ葉山へ出かけていく。そこで彼女の見たものは、大杉と野枝の凍てつくような冷たい視線と、もはやとりつくろうことのできなくなった擬似恋愛の残骸であった。市子がふと口にしたお金の話に弱味をつかれ激昂した大杉はエゴイズムのかたまりとなって市子の心をズタズタにひき裂いた。

もはや私の敗北は明らかだが、私は二、等級の愛を恵まれて満足しようとは考えていない。

市子の怒りは爆発する。

今こそ、その時がきたのだ。（略）鋭い刃先をジッと見ているうちに、私はいままら楽に大杉氏が刺せると思った。

のちに、市子は公判廷で事件の動機を「嫉妬」だといいきっているが、それは信頼と尊敬にうらうちされた愛情を裏切る大杉への「失望憤怒」が有機的にまじりあった「嫉妬」である。理想の恋愛生活を「互に互の人格を犯し合うことなく、共に勉強し共に思索し、理想と希望を同じくし互にその仕事と傾向とを理解し合う」

生活（『僚友恋愛』）だと考える彼女にとって、大杉の「愛の基調の不純」は決して許すことのできないものであった。「怒りは、いい加減なごまかしで決着させてはいけななんだ」『対談・女が斬る』という市子のことばは、私の心にかつてない激しさで迫ってくる。ここきて、市子のなすべきことは一つしか残されていないかった。復讐である。人の純粹な情感をもてあそぶ者への復讐である。

市子をもってきた短刀で、大杉ののどをついた。

大杉氏の記事ではここがやや新派の芝居がかりで、『待てー』と叫んだことになっているが、事実は反対に彼は大声に泣いてゐた。そしてこの瞬間私はもうこれでよいと考へた。この男は今こそ自分でやったことが、なにを価ひしてゐたかを知ったのだ。私は彼の全心が私に加へた欺瞞にたいして詫びてゐることを知った。（『豚に投げた真珠』改造）

大沢正道氏は「市子は大杉の自由恋愛の理論に忠実であろうとした。」さらに、「市子の一刺しは『理論』の最後の報復であった。」と述べておられる。市子も、

私は自分の一生の悲劇は、恋愛というものを、本能によらずに、頭の上だけでしていたことにあると思う。頭脳が先走っていて現実というものが見えなかった。

と、書いている。が、ここで少し異なった角度から、市子の一刺しを考えてみたい。

大杉の思想の中核をなしていたのは「生命の哲学」である。彼は、大逆事件で殺されていった幸徳秋水らの死をとおして、それを

凝視した。「死について、深い体験をもつ人間であるからこそ、生命に対する、生命の力に対する強烈な賛美と憧憬が提起されたのではないだろうか。」と大沢氏は大杉の「生命の哲学」を解釈しておられる。大杉はいわば、社会という外面から死をみつめた人といえるであろう。では、市子はどうか。彼女は、恋愛の苦悩の中で自殺の誘惑にかられながら、内面から死をみつめた。大杉ののどをさし、死を決意して海に入った瞬間、彼女は「死」と「生」を同時にみるのである。そして、「死」をしりぞける力強い「生」への希求を自覚した時、彼女は暗い愛欲の闇から脱出した。市子の死の凝視は恋愛をとおしておこなわれた。「エロチズムは、死を賭すまでの生の賛歌である。」(G・パタイユ)ということばがあるが、彼女は自らのエロスの旋律を死の凝視によって、「生」という舞台の上で奏でたのである。となると、市子の一刺しは、単に「理論の報復」ではなく、「エロスの復讐」「エロスのやい刃」だといえるのではないだろうか。

とにかく、この複雑な恋愛は、市子が下獄することによって一応の終止符がうたれるのである。

第三章 市子の社会的活動

―たぐましき再生―

日蔭茶屋事件によって獄に下った市子は、自らの内面にはこ先を向け、深く自己観照をした。聖書をよみ返し、仏教書を手にとり、バランスをくずしていたパトスとロゴスの統合をはかった。

トルストイの小説『クロイツェル・ソナタ』の中に、次のような文章がある。

愛の時期があれば、次には憎しみの時期がくる。愛の時期が熱烈であれば、憎しみの時期も長く、愛のあらわれが比較的淡泊であれば、憎しみの時期は短いのです。

結果はどうあれ、純粹に激しく燃えた恋の炎をけすためには、獄での二年間は必要であったといえるであろう。

心に深い傷を負った彼女は、獄中において何もかも失ってはじめて知ることのできる人間の悲哀を味わった。囚人の唯一の通用語である「お大事に」ということばは、誰からの保護もえられず、まったくの孤立した状況におちいつているお互いの立場を思いやったことばである。その深い悲しみを、彼女は精神内で発酵させ、やがてそれを広く人間愛へと転化していく。

それまでの彼女は、常に強者であった。貧困にも、孤独にも耐えうる、理論に裏うちされた強さをもっていた。しかし、それは冷たい強さであった。今までの自分が全てにおいて理論から出発していたことに気付いた彼女は、人間の本性としての情感を、弱者のもつ悲しみの内に見出し、人間の魂と魂との間のみ交り合う共感を知った。そして、そこから彼女は他に比類のないやさしさをはぐくんできた。このやさしさは、戦後の彼女の飛躍のエネルギー源となるのである。

しかし、出獄してから終戦をむかえるまでしばらくは彼女の逃避行はつづく。

出獄後まもなく、辻潤の紹介で（皮肉なめぐりあわせだ。）知り

あった鈴木厚という年下の評論家と彼女は結婚した。自伝を読むかぎりでは、希望に胸ふくらませての結婚でないことは明らかである。それでも、彼女なりの理念をもって結婚にのぞんだ。が、「現在の不安定な生活に飽きたから」という動機でスタートした結婚は、その出発点において、十数年後の破綻の種をすでにまいていた。

大杉との恋愛に心身共すりへらした市子はその傷手から立ち直るため、長い間沈黙した。が、彼女の精神は逃避行をつづける中においても決してマヒすることはなかった。彼女は「世間を離れて、平凡な生活人」になろうとした。それは、自分がおこした事件が「日本の労働運動に挫折を与えた」ことへの自責の念によるものであったという。しかし、これは彼女のセンチメンタルなうぬぼれではあるまいか。

結婚生活にはいったものの、大杉との「古い関係の澱のようなものは、まだ濃厚に」彼女の精神にかけをさしていたし、大杉に対する批判的な気持ちも多分にのこっていた。

職業軍人の子として生まれた大杉氏の労働運動における唯一の弱点は、生来の貴族趣味だった。大杉氏には、それを恥じると同時に誇りでもあるような屈折した心理があった。

恋愛の魔力からときはなたれた時、その恋の対象であった大杉という人間の内幕を見透かした市子のことばは、厳しい。

しかし、大正十二年の関東大震災の混乱の中でおこった大杉、野枝、大杉の甥橘宗一の虐殺事件は、彼女に衝撃を与えずにはいかなかった。驚きとか、悲しみとかといった一義的なことばではとても言いあらわせない複雑な心境であったろう。

私にとつては、ショックという程度のことばではいいつくせない大事件であった。

憲兵隊の手によって殺された大杉と野枝の最後は壮絶をきわめるものであったが、二人共疊の上で往生できるような人間ではありえないことは、誰しも思うことであらう。

らいてうは、

野枝さんはああい運動を迎るべく歩いてきた人なので、やがていつの日か、野枝さんがこのような運命に殉じることが、わたくしにとって予測できないことではなかったのです。と、比較的冷静にうけとめている。

ここで考えなければならぬのは、私たちの、法にたいする意識である。主犯の甘粕憲兵大尉は、「平素より社会主義者の行動を国家に有害なりと思惟しありたる折柄、今回の大震災に際し、(略)自ら国家の害毒を芟除せん」と考え、危険人物である大杉らを殺したと、自分の立場を弁明している。この甘粕大尉の弁明に対して、人々は幼い宗一をも殺した点においてのみ彼の行為を断罪しようとした。「国家の秩序維持」を口実に、法を無視し、私的感情によって大杉らを殺したことを問うものはなかった。

市子はこのことをどのように考えたであろうか。「出獄らしい、いっさいの抵抗をやめていた」彼女であるが、この事件は、改めて彼女に、人間・社会・法といったものを認識させたであろう。が、彼女は容易に冬眠状態からぬけ出ようとはしなかった。「思想弾圧、超国家主義の嵐」のふきあれるなか、同志たちへの援助は惜しまなかったものの、彼女自身は第一線において活躍することなく、翻訳

家としての仕事に専念した。

出獄から終戦まで、三十年近くも沈黙を守った彼女は、理想社会の建設への情熱をもやしつづつ、理想家としての理論の完成をはかった。それは、かつての冷たい理論ではなく、人間の情感の内に血肉化した理論であった。ここに市子は、ヒューマニストとして大きくよみがえり、新しい社会の中で、実践活動を開始する。

終戦後の彼女の年譜をみてみると、その活発な活動のあとがうかがえる。民主婦人協会の設立、自由人権協会理事（昭和二十二年）、神奈川県労政審議会委員（同二十三年）、労働省婦人少年問題審議会長、麻薬対策審議会長（同二十六年）をへて、ついに昭和二十八年、衆議院選挙に社会党から立候補し、当選した。

婦人議員・神近市子は、「革新」をさけびつづつ、長く女性を苦しめた売春の消滅をめざして、売春防止法制定に奔走した。そのひたむきな姿勢に、私は心から拍手をおくりたい。

おわりに

不十分であるが、市子の生き方を考察しおえ、私はまた、あの不思議なやさしさに包まれているのを感じる。彼女が生涯かけて見出した最良の宝ものは、このやさしさであろう。

市子は、恋を得ることによって女性としてめざめ、恋を失うことによって人間としてめざめた。彼女の生き方をみていくうちに、私は幕末の動乱期に材をえた小説『花神』において、司馬遼太郎が次のような歴史観を述べているのを思い出した。

革命には三種類の人間が必要であるといわれる。初期、詩的な予言者が出現する。中期、卓抜な行動家が出現する。後期、先駆者の理想を容赦なく捨て、革命の世をつくりあげる処理家が登場する。

文学と宗教のもつロマンチズムの内に己れの未来をみ、恋愛において、危険をかえりみず、自らの欲するままに行動し、婦人議員としてさまざまな問題を処理していった彼女の八十年余の歴史は、まさに革命の歴史である。女として生きぬいた革命の歴史なのである。議員生活をやめ、人生のたそがれ時にたつて、彼女は何を思うのであろうか。再び、自伝のあとがきをめくってみよう。

現代の婦人は、一見幸福そうに思われる。が、けっして思想の上で幸せになったとはいえない。（略）教育によって得たものを土台にして創意を起こし、自分の生活をどう築いていくかという「意志」を持たなければ、婦人の地位はふたたび戦前の暗黒時代の低さにひき戻されてしまうだろう。

彼女は、現代女性の状況における虚を鋭くついている。おだやかな中にも、激しいものをのぞかせて、まるで私に挑戦状をたたきつけているようだ。

既成の社会の求める女の像にとらわれることなく、また習俗の中にもうもれることなく、自身の「女」というものを失わずに、新たな生き方をさがしだせ、と彼女はいっているであろう。

彼女の歩んだ道は、石ころだらけの険しい道であった。私の前にはどのような道が開かれているのであろうか。どの道を歩むかは私しだいだ。私は私なりに、自らの意志に従って、「女」であることの意味を考えつつ、一步一步進んでいきたい。

参 考 文 献

- 『神近市子自伝・わが愛わが闘い』 講 談 社
『女性思想史』 神近市子 亜 紀 書 房
『大杉栄研究』 大沢正道 法政大学出版局
『大杉栄自叙伝』 岩 波 書 店
『元始、女性は大陽であった』①②④ 平塚らいてう
『青鞥』の女たち』 井手文子 大 月 書 店
『おんなの歴史』(下) もろさわようこ 海 燕 書 房
『おんなの戦後史』 もろさわようこ 未 来 社
『大正デモクラシーと女性』 井手文子・江刺昭子 未 来 社
『対談 女が斬る』 小沢濠子・桐島洋子 合 同 出 版 社
『現代婦人運動史年表』 三井禮子編 講 談 社
『女性解放の思想と行動戦前編・戦後編』 田 中 寿 美 子 三 一 書 房
『日本婦人問題資料集成第八巻思潮』(上) 時 事 通 信 社
『新しき恋愛の理論について』 丸 岡 秀 子 編 九 岡 秀 子 編
『僚友恋愛』 右 書 所 収 ド メ ス 出 版 右 書 所 収 右 書 所 収

〔評〕

「現代女性の典型はなんといっても職業婦人(ないしは労働婦人)でなければならぬ。」「本当の婦人解放は、婦人の家庭生活と職業生活との調和において見出されるべきものである。」

これは、今からはすでに半世紀も前になる大正末年ころの平塚雷鳥氏のことばである。また神近市子氏は、昭和四十七年刊『神近市子自伝』の「あとがきにかえて」の中で、

「現代の婦人は一見幸福そうに思われる。が、けっして思想の上で幸せになったとはいえない。物質が戦中・戦後にくらべて豊富になり、外見がきらびやかになっただけのことである。」戦後の一時期にくらべて婦人解放があと戻りしていることは見逃せない事実である。目先の消費生活に魂を奪われて、次第に平和がおびやかされ、せっかく手にした男女同権の旗が色あせていくことに、今こそ婦人たちは注目すべきではないだろうか。」

という。右の両者を併せ読むと、婦人解放運動の理想と現実、その向うべきところと、それへの障害がどこにあるかがはつきりする。

『神近市子自伝』を読んだ感動からこの卒論に着手した貞弘さんが、

「彼女は現代女性の状況における虚を鋭くついている。……私の前にはどのような道が開かれているのであるか。」

という時、貞弘さんにも両先輩の指摘した問題が正しく捉えられ、同じく困難な問題の前に決意をせまられていることがわかる。

なお論中には、神近市子の容貌の変化に注目したところ、その大杉刺傷をあえて「エロスの刃」とした点、やさしさについてなど、

独自の把握が示されている。文学性については、資料入手は困難であったろうが、せめて『青鞥』上の作品などに当ててみれば、もう少し具体的に変わったであろうと、指導担当者の手ぬかりが悔まれる。

この卒論を読みつつ、御高齢の神近さんに思いをはせた。小島信夫『私の作家評伝』の「有島武郎」の章に、八十一才になられた神

会員 近著 紹介

九州方言学会編『九州方言の基礎的研究』

本書は、九州域方言についての広域地点調査研究・集中地点調査研究・史的文献調査研究の三部から成っており、このうち、集中地点調査研究としては、大分県直入郡直入町長湯、佐賀県佐賀郡富士町北山、熊本県牛深市深海町、鹿児島県揖宿郡山川町岡兒ヶ水の四地点の方言について、各々、音韻・文法・語彙の面からの詳細な記述がなされている。このうち、鹿児島県岡兒ヶ水方言の文法・語彙の記述を瀬戸口俊治氏が担当した。

(B4判、七〇四ページ、昭和四四年五月三十一日、風間書房刊。
定価一、〇〇〇円)

近さんの気魄の籠った言葉が引かれ、「有島が思わず接吻せざるを得なかった」女性として触れられており、思想的にも市子は「有島の系統」であって、「有島の死後、有島の唱えた道を歩いてきているとも考えられぬことはない。」と述べられているのであるが、このような神近への歩みについても、貞弘さんが今後の課題として追求していただけることを期待したい。(天野 茂)

藤原与一編修 広島方言研究所紀要

『方言研究叢書』第6巻 方言文表現法

本書は、『方言研究叢書』全十巻の中の一冊、方言の共時論的な研究、方言文表現法の記述論文二編が収められている。目次は次のとおりである。

神部 宏泰 隠岐島五箇方言の文表現法

瀬戸口俊治 鹿児島県指宿郡山川町徳光方言の方言表現法

(A4判、二二七ページ、昭和五十一年五月七日、三弥井書店刊。定価二、八〇〇円)

会員近著・編者紹介

鑑賞日本古典文学10 『王朝日記』

本書は、鑑賞日本古典文学全三六巻の中の一冊で、王朝の四つの日記作品の鑑賞を中心にして、ほかに「王朝日記の窓」の題下に七編の論考が収められている。目次の大要は次のようである。

序説 清水 文雄

土佐日記 白田甚五郎

蜻蛉日記 柿本 奨

和泉式部日記 清水 文雄

更級日記 松村 誠一

王朝日記の窓

(A5判、四六七ページ、昭和五〇年七月三〇日、角川書店刊。
定価一、五〇〇円)

『日本現代文学とキリスト』 明治・大正篇

『現代日本文学とキリスト教』全三冊のうちの第一冊目、明治・大正篇で、目次は次のようである。

漱石——その内なる神

——「行人」より「道草」へ——

有島武郎の思想と作品

荒村と臥城

——ひとつの荒村評価をめぐって——

新詩社の歌人大井蒼梧

倉田百三と赤岩栄

——「念仏の変質」と

「福音からの脱出」は可能か—— 折原 脩三

(A5判、一五九ページ、昭和四十九年九月十日、桜風社刊。
定価一、八〇〇円)

豊嶋 睦編 『韓詩外傳索引』

本書は、『韓詩外傳』本文・索引・検字の三部から成っている。本文は、鳥宗成校『韓詩外傳』等刻本によって、十卷三百十二章に分けられている。『韓詩外傳』は、多くの詩詞を採択しており、詩詞解説書とみなされているが、本書には、その本文枠外に、該当する詩經の篇目が附されている。

(贈写刷、B4判、三七六ページ、昭和四十七年七月三十一日、比治山女子短期大学刊。非売品)